

2010年度 人間福祉学部報

■ 社会福祉学科



社会福祉学科は、アメリカのケースワーク理論を導入したソーシャルワークの実践理論を基盤として、現代における複雑化した社会問題に対応し得る深い知識と優れた実践能力を有する「ソーシャルワーカー」又は「ソーシャルワーク・マインドを有した市民」の養成を目的としています。社会福祉士や精神保健福祉士といったソーシャルワーカーの国家資格取得の推進はもちろんのこと、高齢者、障害者、児童福祉の分野だけでなく医療・精神保健分野や犯罪や災害の被害者支援など、多様な現代社会問題に対応できる人材育成を行っています。とりわけ本学科では現場に強い人材を育成するためにユニークな実践教育プログラムを実践しており、ここではその概要を簡潔に紹介します。

【1年次】

1年生には、多くの体験学習の機会が用意されています。自分自身の体験や人との関わり、その場で起こっていることを材料として学ぶ体験学習は、実践の学問と呼ばれるソーシャルワーク教育の第一段階として位置付けられています。

「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」では、千刈キャ

ンプで1泊2日の合宿を行い、自己と向き合い自分とソーシャルワークとの繋がりを考えたり、グループでの野外ゲームを通して他人との関わり方やチームワークの重要性を学んでいます。また、先輩から話を聞くことで今後ソーシャルワークを学ぶ道筋を考えることに加えて、3年次に行うソーシャルワーク実習について「楽しみなこと」「心配なこと」、準備として「できること」を考え他の学生と思いを共有する機会を作っています。合宿以外にも高齢者・障害者施設や社会福祉協議会などの見学を通して、施設の職員や利用者との学生としての関わり方を学んだり、地域の福祉課題やそれに対する取り組みを学んだりもしています。

「ソーシャルワーク演習Ⅰ」では、ラボラトリー方式の体験学習を通して自己理解や対人感受性を養い、ソーシャルワーカーの専門的アイデンティティを形成する価値の基盤作りを行います。学生は演習の授業で、自己理解を深めるために東大式エゴグラムを用いて自己分析を行ったり、グループで合意形成を目指すことの重要性や難しさを体験する「コンセンサス実習」を行ったり、アイマスクをしたパートナーを、言葉を使うことなくエスコートして校内を散策することで非言語コミュニ

ケーションの重要性について考えています。

【2年次】

2年生になると、1年次よりもソーシャルワーク実践における専門的な「価値」「知識」「技術」を体験的に学ぶことに重きがおかれます。また、3年次に行うソーシャルワーク実習の配属やその準備としての学習体験を積むことが学習目的となります。

「ソーシャルワーク演習Ⅱ」の授業で、コミュニケーションラボを活用して対人援助技術における基礎的コミュニケーション技法を習得する訓練を行っています。また、様々なソーシャルワークの実践事例を分析し、ソーシャルワークの援助をいかに効果的に行うのかを考えています。また、地域に出かけてタウンウォッチングを行い、発見した社会資源を調整・活用・開発して地域の問題解決プランを考える「社会資源フィールド演習」という取り組みも行っています。更に秋学期には、ソーシャルワーク実習における目標設定を行い、それに伴って個別面接を行い実習配属先とのマッチングを行っています。

【3年次】

3年生は、直接的な体験学習の機会となる「ソーシャルワーク実習」（社会福祉援助技術現場実習）が中心となります。今まで授業で学んだソーシャルワークの知識・価値・技術を実践の場で統合化させ、それを現場で自分のものとして使えるように訓練するのです。

「ソーシャルワーク実習指導Ⅱ」（社会福祉援助技術現場実習指導）のクラスでは、領域別クラス（高齢者、障害者、児童、社会福祉協議会、公的扶助、医療）に分かれて、現場の第一線で活躍している方を講師としてお招きし、夏休みの実習に備える準備を行っています。「ソーシャルワーク実習」（社会福祉援助技術現場実習）では夏休みを中心に学生が現場で意味のある学習体験を行えるよう、実習先の担当職員と担当教員がチームとなり学生をサポートしています。また、実習後には実習ふりかえり会を設けて、どれだけの目標が達成できたのか、積み残した目標に今後どのように取り組むべきなのかを確認しています。また、次年度に実

習に行く学生と自分の実習での学びを共有しています。

【4年次】

4年次には、ソーシャルワーク実習（社会福祉援助技術現場実習）で学んだ専門的価値・知識・技術を更に高め、今後のキャリアに繋がる実習プログラムを選択することができます。ソーシャルワーク実習で行くことのできない幅広いフィールドで実習することが可能です。また、卒業研究の調査フィールドとして実習を選択する学生もいます。

「社会福祉インターンシップ」（社会福祉アドバンスト実習）では、3年生で行った実習フィールドに長期的に関わり自分の専門性を高めることが可能となり、また一方でNPOや国際機関等で、ソーシャルワークの専門性を活かせるフィールドで実習を行うこともできます。また社会福祉士とは別の国家資格である精神保健福祉士の取得を目指して行う「精神保健福祉援助実習」や、医療ソーシャルワーカーとして働く準備を行う「医療福祉実習」も4年次に履修可能です。

このような実践教育プログラムを学生に提供するのと同時に、ソーシャルワークの現場で既に活躍している方々と合同研究会を行い連携を図ったり、更に充実した実習プログラム作りを行うことにより、学生に提供する実践教育の質の担保・向上を行っているのです。（高杉 公人）



■ 社会起業学科



人間福祉学部開設から早3年目を迎え、今年度もまた新生入生たちが4月2日に入学してきました。2010年度の社会起業学科は77名の3期生を迎え、スタートしました。学科として、最初に行った行事は4月3日の学科ガイダンスでした。牧里毎治教授の歓迎の挨拶に始まり、専任教員の自己紹介、カリキュラム、留学プログラム、インターンシッププログラム、実践教育支援室の役割などの紹介を行いました。入学直後ということもあり、学生たちはみな緊張した面持ちで教員の説明に耳を傾けており、これから始まる新学期に向けて身の引き締まる思いがしました。

入学早々の4月、本年度も学科合宿を行いました。昨年度も実施(2010年1月29日(金)～30日(土)、関西学院千刈キャンプ場にて)しましたが、社会起業学科に愛着を感じてもらい、全体として勢いを出していくためにも「学ぶ」「食べる」「語らう」機会を早めに設けようということで、4月24日(土)～25日(日)の2日間、関西学院大学G号館及びスポーツセンターにて行いました。6名の学生スタッフを中心に、プログラムの企画・運営を行い、教員はあくまでサポートという設定で行いました。学生スタッフの中にはイベントの企画・運営が初めてという者もあり、準備期間を含め大

変苦勞したと思いますが、学生スタッフの頑張りもあり、非常に有意義な2日間になりました。詳細は下記の通りです。

開催日：4月24日(土)～25日(日)

場 所：関西学院大学G号館、スポーツセンター

対 象：社会起業学科全学生、教員

参加者：学生90名、教員11名

プログラム：

〈1日目〉

13：00 開会式、ネームプレート探し

13：30 田辺大氏講演(社会起業家/目と耳の両方に障がいがある盲ろう者と視覚障がいの者のマッサージ師が働く場として注目されている「手がたり」を運営)

14：45 学生報告会(学生団体10団体による報告)、GP説明

17：00 アイスブレイク(人間知恵の輪、学生が考えたクイズ)

18：00 夕食(学生食堂にて)

19：00 フリータイム(スポーツセンターにて)

〈2日目〉

7：30 朝食(スポーツセンターにて)

9：00 礼拝(小西砂千夫教授、G号館チャペルにて)

9:45 多様性ゲーム
11:30 閉会式、写真撮影

5月、社会起業学科独自のプログラムである英語短期留学にて10名がカナダのクィーンズ大学に留学しました。参加者数は昨年度の12名を下回ったものの、昨年度は当該学生の13.4%、本年度は14.7%と、割合で見ると増加しており、2年目ではありますが、海外留学への関心は高まりつつあると思います。昨年度は新型インフルエンザの流行に悩まされましたが、今年度は大きなトラブルもなく、現地での学びも無事終了し、8月に全員が元気に帰国しました。11月に2回に分けて、参加者による報告会を実施しました。

7月10日(土)に1年生を対象とした懇親会、9月29日(水)に2年生を対象とした懇親会を開催しました。学年別懇親会は2008年度からの学科恒例行事となっており、学生の学ぶ意欲と学科への求心力の向上、社会起業という新しい分野への関心を高めることなどを目的として行っています。特に、2年生の懇親会には、専任教員全員、加えて実践教育支援室からの参加もあり、学生にとっては貴重な時間となりました。2年生は、3年次より始まる研究演習Ⅰの選択時期でもありますので、一人の教員と話し込むのではなく、複数の教員と会話を交わすことで情報を収集し、自分の将来について考えていたように思います。授業だけではなかなか縮まらない、学生と教員との距離を、食事をしながら気軽に話すことで縮めることのできる絶好の機会ですので、来年度以降も続けていきたいと考えております。

また、学部開設後初となる球技大会(バレーボール、バスケットボール)を学部行事として7月10日(土)に開催しました。学部行事ではありますが、社会起業学科の1年生数名がスタッフとして大会の企画、広報をしてくれ、100名近くの参加者が集まりました。大会当日は小西砂千夫教授の選手宣誓から始まり、参加者全員が爽やかな汗を流しました。1年生中心の大会になってしまいましたが、2年生、3年生、また3学科すべてから、さらには教員の参加もあり、大会は大いに盛り上がりました。学年・学科を超えた交流の機会は貴重であり、今後も継続して実施できればと考えています。

今年度も春学期開講の学科生必修科目「多文化共生論」の授業との合同開催の形で、世界各地で活躍する社会起業家たちを招き、全4回にわたり連続公開講座「世界を変える社会起業家たち2010」を開催しました。なお、本講座は、文部科学省大学教育推進プログラムの一環として開催しました。詳細は下記の通りです。

- 第1回 5月6日(木)16時50分～18時20分
◇講師 村田早耶香氏(NPO法人かものはしプロジェクト共同代表)
◇テーマ カンボジアの子ども達の笑顔のために～28歳女性が社会起業で児童買春問題に挑む～
- 第2回 5月13日(木)16時50分～18時20分
◇講師 マリー・ソー氏(Ventures in Development創設者)
◇テーマ 社会的企業の発展経緯—SHOKAYの事例を通して
- 第3回 6月10日(木)16時50分～18時20分
◇講師 大森恵実氏(アジアアフリカ国際奉仕財団)
◇テーマ 変革は一步ずつ～対象者の自立支援のためにできることから始めること～
- 第4回 7月1日(木)16時50分～18時20分
◇講師 江崎智里氏(ヴェトナムの知的障害者就労支援カフェ Cafe HOA ANH DÀO)
◇テーマ サクラカフェと愉快的仲間たち

学内で人間福祉学部の学生に会うと、いつも元気よく挨拶をしてくれます。学生と教員の間で、このような関係を築くことができたのも、学部開設時から行ってきたさまざまな活動がよい方向に向いているからだと思います。来年度は完成年度を迎え、人間福祉学部初の卒業生を社会に送り出します。人間福祉学部という新たな学部に最初に入学してきた1期生が、4年前に比べ、どのように変化し、成長したのか、間もなく明らかになります。社会起業学科で学んだ知識、得た経験をどの分野においても発揮できる人材を育成できるよう、今後もこれまでの活動に甘んじることなく、新たな行事・活動の実施に取り組みたいと思います。(林直也)

■ 人間科学科



人間科学科は2010年4月2日の関西学院大学入学式に、女子54名、男子62名、計116名の新入生を第3期生として迎えることができました。昨年と同じく学部宣誓式から新入生にとって人間福祉学部ならびに人間科学科における実質的なスタートとなりました。4月3日から、履修指導、学科オリエンテーションが開催されました。特に学科オリエンテーションでは各教員の自己紹介が研究の専門性を中心に説明され、学習への動機付けを強く促進する内容となりました。本年度の新入生の入試形態も昨年度同様多岐にわたり、多くの可能性を秘めた第3期生であるといえます。

2010年度の教学上の大きな話題は、3年生の研究演習Ⅰがスタートしたことです。昨年度の甲山自然の家における人間科学科合宿キャンプを踏まえ、学生自身が興味を持つゼミに所属し、1、2年生での学習成果をもとにより進んだ専門教育に取り組むこととなりました。やはり、教員ごとの専門分野を少人数で学ぶことのできる研究演習は大学教育の醍醐味といえます。今後は最終学年の研究演習Ⅱ、卒業研究へと勉学を進めていくこととなり、その成果が大いに期待されます。

一方、人間科学入門、人間科学の100冊、人間科学科合宿キャンプ、スポーツ大会などが前年と同様に行われました。人間科学入門は、「佐藤君の人生」というストーリーに基づいて代表者中塘

二三生先生の指導のもとで行われました。佐藤君という架空の人物の一生ではありますが、この人物の人生劇場に各教員の専門性を当てはめ、講義を展開するという教授方法は、複数教員がオムニバス形式で担当する科目にありがちな担当コマごとの連続性の弱点を見事に補完し、ストーリー性を重視することにより学生の皆さんが人間科学という複合領域への興味を惹起し、更なる学習意欲の向上を図ることができたといえます。学生による授業評価、レポートからみても学生の反応は概ね良好でありました。また、「読書は知的探究の第一歩」という理念のもとで、人間科学科所属教員が人間科学科学生に「これは読んで欲しい」という書籍を指定した「人間科学の100冊」を配架したコーナーを人間福祉学部資料室ならびに実践教育支援室に設置しました。この「人間科学の100冊」から「何を読みましたか?」といった質問が研究演習の選考面接であったと聞いています。学生がこのコーナーをより多く利用し、名実共に人間科学科生の知的財産として蓄えてくれることを教員一同、切に願っています。

そして、昨年度学科行事として実施したスポーツ大会は、学科内行事としてではなく、学部行事として、社会起業学科林直也先生の指導のもとで実施されました。人間科学科の取り組みが学部全体に波及する結果となった訳です。参加した学生

は学生対抗、教員チームとの対戦と熱戦をくりひろげ、若者らしい歓声、すがすがしい汗をながし、学科の枠を超えた交流がなされました。

以上が人間科学科の全体の2010年度の主な報告になります。このほかにもアンベッケン先生が昨年引き続きスウェーデンから共同研究者を招かれたり、藤井先生が中心となった死生学など、研究活動も盛んにおこなわれています。

学生の中には正課外活動で成果を上げ関西学院大学の名声向上に寄与している学生も多くいます。そして、2011年度は先ほどから述べておりますよ

うに大学教育の根幹にあたります研究演習のまとめとしての「卒業研究」が提出されます。また、学生たちはこの人間科学科での学びをもとに就職や進学などといった形で社会に出て行く先を決める年でもあります。学科設立の理念が成就したかは来年度に評価されます。その意味でも、人間科学科らしい学生・教員の良い緊張感のもと、学生の皆さんが様々な分野で多くの成果をあげることが出来るように今後もがんばってほしいと願ってやみません。
(河鱈 一彦)

■ 言語教育

必修外国語科目の英語講読では、流暢さの向上と素早く的確に情報を読み取る能力の強化をめざし、副読本の多読課題を出しています。資料室に約2,000冊の副読本を準備し、学生各自が能力に応じた難易度のものを選び、2～3週間に一冊、各学期最低5冊を読むことを課しています。読後には理解を確認するためのクイズを解きます。2010年度にも大量の副読本が補充され、学生が自分で購入する必要はありません。

英語コミュニケーションの授業では英語による異文化間コミュニケーション能力を伸ばし、学習意欲をさらに高めるための新しい試みを行っています。春学期にはシンガポールより

Anita Ingham氏(生物学博士)を招いてのミニレクチャー、ネパール人留学生Prabin Khanal氏(神戸大学大学院在籍)を招いてのミニレクチャーを行いました(写真上)。秋学期にはさまざまな国の交換留学生との交流を取り入れた授業を行いました(写真下)。この結果は研究報告として複数の学会で発表されています。

この他に、人間福祉学部では、必修科目の英語表現、第2言語として英語コミュニケーション、フランス語、ドイツ語、中国語、朝鮮語、スペイン語、日本手話を開講しています。また、外国人留学生用に、日本語I(必修科目)、基礎英語(選択科目)を開講しています。
(福居 誠二)



■ チャペル

日時	担当者	主題 (奨励題)
4月7日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	チャペルオリエンテーション
9日(金)	嶺重 淑 (宗教主事)	チャペルオリエンテーション
12日(月)	広瀬康夫 (吉岡記念館職員)	讃美歌を歌おう①
14日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「地の塩として生きる」
16日(金)	広瀬康夫 (吉岡記念館職員)	讃美歌を歌おう②
19日(月)	エルス・マリー アンベッケン(人間科学科教員)	「輝く人になるために」
21日(水)	グリーンクラブ	音楽チャペル
23日(金)	混声合唱団エゴラド	音楽チャペル
26日(月)	川島恵美 (社会福祉学科教員)	「4つの校歌」
28日(水)	藤井美和 (人間科学科教員)	「愛について」
30日(金)	聖歌隊	讃美歌を歌おう③
5月3日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「タラントを活かす」
7日(金)	林 直也 (社会起業学科教員)	大切なこと①
10日(月)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
12日(水)	辻 学 (広島大学大学院教授)	「自分に返る時間」
14日(金)	上ヶ原ハビタット	活動報告
17日(月)	日本・トルコ学生交流プログラム	活動報告
18日(火)	大学合同チャペル (第1日) に合流	} 総主題：建学の精神
19日(水)	大学合同チャペル (第2日) に合流	
21日(金)	甲斐知彦 (人間科学科教員)	大切なこと②
24日(月)	中島尚美 (社会福祉学科教員)	「希望について」 (大切なこと③)
26日(水)	今村仁美 (人間福祉研究科M1)	「確かな土台」
28日(金)	C. M. ヘアマンセン (法学部宣教師)	English Chapel
31日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「出会い」 (大切なこと④)
6月2日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	テゼ共同体の歌
4日(金)	学部合同チャペルに合流	宣教師によるチャペル
7日(月)	宗教総部献血実行委員会	春の献血週間を覚えて
9日(水)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
11日(金)	木原桂二 (元宝塚バプテスト教会牧師)	「自由とは何か」
14日(月)	小西砂千夫 (社会起業学科教員)	「後の者が先になり」 (大切なこと⑤)
16日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「時を知る」
18日(金)	藤川 義 (人間科学科2年)	「心が折れたとき」
21日(月)	前橋信和 (社会福祉学科教員)	大切なこと⑥
23日(水)	ゴスペルクワイア (P.O.V.)	音楽チャペル
25日(金)	徳田真二 (キャンパス自立支援課職員)	「幸福について考える」
28日(月)	富阪 輝 (文学部4年)	「私の目には、あなたは高価で尊い」
30日(水)	今井小の実 (社会福祉学科教員)	「自分の中に歴史を読む」 (大切なこと⑦)
7月1日(木)	国際学部チャペルに合流	English Chapel
2日(金)	聖歌隊	音楽チャペル
5日(月)	片柳弘史 (カトリック六甲教会助任司祭)	特別チャペル
7日(水)	エルス・マリー アンベッケン(人間科学科教員)	"Who are you? & What is Knowledge?"
9日(金)	D. H. デルミン (高等部教諭)	「あなたは私と共にいてくださる」
12日(月)	芝野松次郎 (学部長)	「出会い、そして別れ」
14日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「夏休みを前にして」

日時	担当者	主題（奨励題）
9月20日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「隠された宝」
22日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「創立記念日を覚えて—映像でみる関西学院の歴史—」
24日(金)	佐藤博信 (人間科学科教員)	「心のままに—祖母の思いで—」
27日(月)	木村 愛 (社会学部4年)	「学生生活を振り返って」
28日(火)	学部合同創立記念チャペルに合流	
29日(水)	宗教総部献血実行委員会	秋の献血週間を覚えて
10月1日(金)	住野公平 (人間福祉学部職員)	「苦難の時の友」
4日(月)	ゴスペルクワイア (P.O.V.)	音楽チャペル
6日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	讃美歌を歌おう
8日(金)	聖歌隊	音楽チャペル
11日(月)	A. ルスターホルツ (文学部宗教主事)	English Chapel
13日(水)	エルス・マリー アンベッケン(人間科学科教員)	「愛されるため生れた」
14日(木)	大学合同チャペル [第1日]	} 総主題：世界市民として生きる
15日(金)	大学合同チャペル [第2日]	
18日(月)	上田直宏 (関西学院教会牧師)	「愛するため」
20日(水)	能勢岳史 (神学研究科D1)	「死の中で生きること」
22日(金)	上ヶ原ハビタット	活動報告
25日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「そうになりたい自分とそうである自分」
27日(水)	駒木 亮 (奄美大島・名瀬教会牧師)	「日本を動かしたキリスト者」
29日(金)	宗教総部	活動報告
11月5日(金)	孫 良 (社会起業学科教員)	「こころの余裕」
8日(月)	上ヶ原ハビタット	活動報告
10日(水)	バロックアンサンブル	音楽チャペル
12日(金)	広瀬康夫 (吉岡記念館職員)	音楽チャペル「黒人霊歌からゴスペルまで」
15日(月)	佐原郁代 (人間福祉学部教務補佐)	「ようこそ きこえない娘たち」
17日(水)	安田美予子 (社会福祉学科教員)	「人とのつながりの中で生きる」
19日(金)	嶺重 淑 (宗教主事)	「自己愛とエゴイズム」
22日(月)	田淵 結 (宗教総主事)	「年の終わり」
24日(水)	クランツ作り	
26日(金)	ハンドベルクワイア	音楽チャペル
29日(月)	嶺重 淑 (宗教主事)	「アドベントを覚えて」
12月1日(水)	岡田弥生 (社会学部教授)	「憐れんでくださる神様」
3日(金)	成岡宏晃 (神学研究科M2)	「にんげん」
6日(月)	大学合同クリスマスチャペルに合流	
8日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	クリスマス讃美歌練習
10日(金)	高杉公人 (社会福祉学科教員)	「メッセージの力」
13日(月)	日本・トルコ学生交流プログラム	活動報告
15日(水)	人間福祉クリスマス (次頁参照)	
17日(金)	ルース M. グルーベール (院長)	「クリスマスから考える“Service”」
20日(月)	大和三重 (社会福祉学科教員)	「『希望』はつくれるもの？」
22日(水)	嶺重 淑 (宗教主事)	「平和の君の誕生」
1月7日(金)	芝野松次郎 (学部長)	「出会い、そして別れ (その2)」
12日(水)	学部合同震災チャペルに合流	

*前記のように、今年度は、春学期44回、秋学期43回、計87回(合同チャペルを含む)のチャペルを実施した。昨年度と同様、特に音楽チャペルには多数の出席者が見られた。奨励の多くは学部教員が担当し、春学期は「大切なこと」という共通テーマのもとで奨励していただいた。また、クリスマスチャペルは、昨年と同様、祝会を含めた形で夕刻に実施した(下記報告参照)。来年度は、今年度の反省を踏まえ、さらに充実したチャペルプログラムを提供できるよう努めていきたい。

【2010年度クリスマスチャペル報告】

学部主催のクリスマスチャペル(人間福祉クリスマス)は、昨年と同様、通常のチャペルアワーの時間帯(10:35-11:05)ではなく夕刻に開催し、第一部のクリスマス礼拝(17:00-18:00)と第二部のクリスマス祝会(18:30-19:40)の二部構成で行った。

第一部のクリスマス礼拝は、厳粛な雰囲気の中で守られ、人間福祉学部生のチャペルオルガニストが奏楽を担当し、ハンドベルクワイアの演奏や教員クワイアによる賛美を聴く機会をもった。第二部のクリスマス祝会は会場をG号館2階ラウンジに移して行われ、学部の学生・教職員がともに集い、軽食をともにいただきながら、ヴァイオリン独奏、合唱等の音楽演奏を聴いたり、グループ対抗のゲームタイムやサンタからのプレゼントに興じたりしながら、楽しいひとときを過ごすことができた。

参加者総数は、第一部の礼拝が約60名、第二部の祝会が約90名で、特に学部生の礼拝参加者が少なかった点が残念であった。来年は今回の反省点を踏まえて、開催時間やプログラム内容等を再検討し、より親しみやすいものになるように工夫していきたい。



■ 文部科学省大学教育推進プログラム

社会起業家養成の革新的教育プログラム開発の中間報告 ～専門―実践―応用教育を通じたウェルビーイングに寄与する社会起業能力の育成～

2009年度より3年間の学部教育プログラムとして採択された社会起業学科の取組に関し、本誌では2009年12月からの実績を振り返ることにより、本事業の到達点と今後の課題を報告したい。

本事業は、正課外に位置づけられる「起業プラクティス」と社会起業学科の正課教育の充実に寄与する活動からなる部分と、これらの教育プログラムを評価し、教員がどのように支援するかの方法を含めた教育評価事業の2つの柱からなる。

2009年度は、2009年12月から準備を開始して2010年3月に、学生による学生のための学生の社会起業キックオフ・フォーラム「世界を変える、私のKEYが見つかる」を開催するなど、慌ただしいながらも順調にスタートを切ることができた。2010年度は、4月に川本健太郎特任助教を、また5月には2人目の事務補佐を採用し、専任スタッフ3名と社会起業学科教員や人間福祉実習助手若干名で事業推進に取り組んだ。主な取組内容は以下のとおりである。

正課外の「起業プラクティス」は、本部統括的役割を担う「アソシエーター」、実験店舗『COCOCHI』（学生によるフェアトレードショップ）を企画運営する「オーナーグループ」、学生が企画運営する社会貢献活動の「プロジェクト」、そしてそれぞれの「サポーター」として役割を担う4つのグループにより構成されている。登録は学期ごとに行うが、春学期87名、秋学期79名の参加があった。

「アソシエーター」は学生運営委員会として、12月5日(日)に「社会起業フォーラム～排除・格差・貧困に立ち向かう社会起業家～」を開催し、約160名の参加を得た。

実験店舗『COCOCHI』は、週1～2回の営業とともに、店舗運営に必要な財務管理や営業企画の能力を高めるため、社会起業フレンズであるコンサルタント会社経営者の協力のもとで2回の集中合宿を行った。

「プロジェクト」のうち、『CASA』（学生による

滞日外国人就労支援プロジェクト、カフェ事業）は、イベントへの出店やケータリングとともに週1回のカフェ運営を展開した。2010年度秋学期以降は、本取組から独立し、内閣府・地域社会雇用創造事業交付金事業の採択を受けた「ソーシャルビジネスエコシステム創出プロジェクト」（主催：NPO法人ETIC.）の一環として、NPO法人ETIC.の委託を受けたNPO法人edgeが運営する「社会的企業創業支援ファンド」の支援を受けるという形で、店舗取得のための自己資金の獲得に成功した。この他にも、1年生が組織した「貧困問題研究会」が5月に貧困問題を考えるワークショップ（釜ヶ崎についての研究者である西成市民館職員を招聘）を公開勉強会方式で開催したり、限界集落活性化プロジェクトが松阪市波瀬地区において資源調査のためのフィールドワークを現地社会福祉協議会の協力のもとで実施するなど、様々な活動を展開している。

正課に資する教育的支援としては、学生に対する教育効果を高めるために、社会起業学科公開連続講座（NPO法人かものはしプロジェクト、NPO法人Ventures in Development 〈ViD〉、財団法人アジア・アフリカ国際奉仕財団〈AIV〉、Café HOA AND DÀO 〈サクラカフェ〉等から講師を招聘）を開いた。また、6月にはアショカ（Ashoka）のビル・ドレイトン氏を招いた特別講演会を開催するとともに、7月にはグラミン銀行総裁で2006年ノーベル平和賞受賞者であるムハマド・ユヌス氏の来訪に伴い関連研究会を開催した。その他、英国の社会的企業を学ぶ講演会の開催やNGOエクマットラ共同設立者の渡辺大樹氏による講演会などの共催など、多岐にわたる講演会を開催した。

さらに、夏季休暇等を利用して積極的にフィールドワークを実施した。海外では、カンボジア、ベトナムなど、国内は愛媛県愛南町など、ソーシャルファームや社会問題の現場での学びの機会を提供できた。この他、身近な現場、手軽なフィールドワークの機会を提供するため、『土曜講座』を企

画し、NPO法人たかとりコミュニティセンター、大阪市住吉区浅香人権センター、大阪市西成区釜ヶ崎などでのフィールドワークも実施した。

教育評価事業については、評価指標研究会をNPO法人JAE（日本教育開発協会）の協力のもとで、7回開催した。2011年1月には、主に社会起業家に対してその生成プロセスを明らかにするためのインタビューを実施し、それをふまえて学生の教育効果を測る評価フレームを検討した。2011年2月には、社会起業学科教員を核とした評価作業と並行して、学外関係者などを含めた「社会起業フレンズ」での意見交換会を実施した。これらの評価項目および評価指標の開発については、今後次の3つのカテゴリーを軸に検討していく予定である。

一つめは、“本事業の社会起業学科教育へのインパクトとは何であったのか”ということである。学生への教育効果・学習効果は高まったのかという検証が必要だろう。二つめは、“本事業の終了後へのアウトカムにあたる予測評価”である。「起業プラクティス」の正課科目への移行はシラバス作成や成績評価の方法も含めて、その学士力をどのように定義するかという課題も残している。もちろん全学共通科目としての設定の可能性や学部卒業後の支援のありかたも次のステップへの課題である。最後は、“大学院教育へのインパクト”である。大学院のカリキュラムについては、既に先行して社会起業に関する研究科目の新設を検討中だが、社会起業研究に関する学際的共同研究を社会起業学科教員を核とする研究班を編成して取り組む予定である。

上述のとおり、本事業の推進にあたっては企画はもとより、広報活動、渉外活動などについても有志の学生スタッフを中心に、学生・教職員が一体となって本事業に取り組んできている。今後も引き続きホームページやブログなどの管理運営、ニュースレターやポスター制作、フォーラムやワークショップの企画運営、活動アルバムや記録DVD・報告書の作成なども学生と教職員の共同作業の形で進めていきたい。

(牧里毎治)